

明けましておめでとうございます。本年の「病害虫防除」のコーナーを担当します果樹試験場 病害虫研究担当の前田です。1年間よろしく願いいたします。

さて、皆様におかれましては昨年の病害虫防除はいかがだったでしょうか。新年を迎えるにあたっては、昨年の振り返りをしっかり行い、良かった点は継続、反省点があれば改善していきましょう。

果樹全般

●伝染源の除去

昨年発生した病害の病原菌は、枯れ枝や落葉等に残っています。そのままにしておくと園内の菌密度が高いまま次作がスタートすることになりますので、可能な限り園内から伝染源を除去するようにしましょう。特に、近年は長雨や集中豪雨等の影響で薬剤のみでは防除効果があがりにくいので、下表を参考に伝染源の除去を徹底してください。

なお、カンキツでは切り株や枯死樹も黒点病の伝染源となります。伐根が困難な場合は切り株に肥料袋を被せることで菌の飛散を抑えることができます。

表 主要な果樹病害と伝染源

作物名	病名	伝染源
カンキツ	黒点病	枯れ枝、園内に放置されたせん定枝、切り株、枯死樹
	かいよう病	枝・葉の病斑
ナシ	黒星病	落葉
	葉炭そ病	
	輪紋病	枝幹部の病斑
ブドウ	べと病	落葉 (R5: やや多発生)
	褐斑病	落葉、粗皮
	黒とう病	枝・巻きひげの病斑
カキ	炭そ病	枝の病斑

●防風樹の手入れ

防風樹が過繁茂し、園内の湿度が高い時期が続くと樹体も濡れた状態になり、病害が発生しやすくなります。適度な刈り込みを行い、園内の通風を確保しましょう。なお、防風樹がスギ・ヒノキの場合は、果樹カメムシ類の餌となる毬果が結実しないように刈り込みます。作物の管理が忙しくなると防風樹にまで手が回らなくなるので、今のうちに必要な手入れを行きましょう

露地カンキツ

●貯蔵中の果実腐敗対策の徹底

貯蔵中はこまめに果実の状態を確認し、腐敗果は見つけ次第取り除きます。取り除いた腐敗果は貯蔵庫外に持ち出し、適切に処分してください。

今月から中晩柑の収穫が本格的に始まります。収穫の際はハサミで果実を傷つけないよう丁寧に扱うなど腐敗果の発生を防ぎましょう。特に、今年度は日焼け果の発生が目立ったことから、収穫物に混入させないように注意してください。

●カイガラムシ類・ミカンハダニ対策にマシン油乳剤の散布

冬季のマシン油乳剤散布は、越冬するカイガラムシ類やミカンハダニの防除に有効です。1月上旬までにマシン油乳剤97% 60倍を散布してください。ただし、厳寒期のマシン油乳剤散布は落葉の発生を助長させる恐れがあるため、寒波到来が予想される場合の散布は避けるようにしてください。1月上旬までに散布できなかった場合はせん定終了後の3月上旬頃にマシン油乳剤97%を80倍で散布してください。

マシン油乳剤は、虫体に直接かかると効果が期待できないので、散布の際には樹幹内部にノズルを入れる等して、薬液がかかりにくいところにも十分かかるよう丁寧に散布しましょう。

本誌12月号にもありましたように、近年、生育期のカイガラムシ類、春先のミカンハダニが多い傾向が続いています。冬～春季にマシン油乳剤が散布されていないことが要因の一つと考えられますので、前述を参考に対策を徹底してください。

ただし、樹勢が低下している樹に対してはマシン油乳剤の散布は控え、寄生部位の除去や生育期の殺虫剤、殺ダニ剤で対応してください。また、健全な樹勢となるように栽培管理に努めましょう。

ハウスミカン

●ミカンハダニ対策

ハウス栽培ではミカンハダニが増えやすく、一度増殖してしまうと抑えることは困難となります。そのため、ビニール被覆以降は発生しやすい場所を中心に日頃からよく観察し、発生が見られたら直ちに防除を行いましょう。

また、ハウス栽培ではミカンハダニの殺ダニ剤に対する感受性の低下が問題となっています。殺ダニ剤の使用回数を減らすため、幼果期（果径 25mm 頃）にマシン油乳剤 97% 200 倍を単用で散布します。

ただし、生理落果を助長する等の問題が起こらないよう散布の際は天気の良い午前中に行うこと、散布後は換気を行うなど薬液が速やかに乾くよう促すこと、樹勢の低下している樹には散布しないことに気を付けてください。

●灰色かび病対策

落弁期にナリア WDG 2,000 倍等の殺菌剤にトルキヤップ[®] 1,000 倍を加用し、散布します。本病は花弁に発生するので、こまめに枝を揺するなどして花弁を除去すると発生を低減することができます。ハウス内湿度が高いと発生を助長するため、循環扇等を利用して湿度の低下に努めましょう。

ナシ

●白紋羽病対策

発病樹とその周辺の未発病樹に対し、フロンサイド SC のかん注処理を行います。発病樹には 1 樹あたり 500 倍を 50～100ℓ、未発病樹には 1 樹あたり 1,000 倍を 100～200ℓ目安に処理しましょう。

本処理の効果は 2 年程度持続しますが、その後は再発する場合があります。特に、発病樹では根部を掘り起こして発病の有無を確認し、発生が確認された際は再処理してください。

●粗皮削り

カイガラムシ類やシンクイムシ類など粗皮下で越冬する害虫に対し、粗皮削りは有効な対策です。ただし、フタモンマダラメイガが発生する園では、形成層近くまで削ってしまうと後々本種が寄生しやすくなり、被害が大きくなってしまいますので削り過ぎないように注意してください。

キウイフルーツ

●かいよう病対策

かいよう病の発生を抑えるためには、収穫後から発芽前までの定期的な防除が重要です。このため、既発生園・未発生園に関わらず IC ボルドー66D 50 倍等を 1 か月間隔で散布します。また、傷口から感染しやすいため、せん定等の際には必ず切り口にトップジン M ペーストを塗布し、その後銅剤による防除を行きましょう。

このほか、せん定等の作業は①健全園・健全樹から始める②ハサミやノコなどは樹ごとに消毒する、③枝や幹から白色～赤褐色の樹液漏出が見られた場合は、発見次第切除するようにしてください。「ヘイワード」の場合は、樹液漏出箇所から褐変が見られなくなる位置まで遡って枝を切除します。幼木やヘイワード以外の品種については、品種や樹の状態によって切除する程度が異なるため、指導機関等に相談して実施してください。

●クワシロカイガラムシ対策

クワシロカイガラムシの発生が多い園では、マシン油乳剤 97% 30 倍またはマシン油乳剤 95% 14 倍を散布します。なお、銅剤との散布間隔を少なくとも 2 週間以上空けて散布してください。

モモ・スモモ

●モモ縮葉病、スモモふくろみ病対策

両病害とも発芽前までの薬剤防除が重要です。発芽後の防除では十分な効果が期待できませんので、発芽前までに石灰硫黄合剤やチオノックフロアブル等を散布してください。